

ル・コルビュジェの考える空間構成

S.K.

今回私は、国際文化学部の研究旅行制度で 20 世紀の建築家ル・コルビュジェの建築作品をいくつか訪れることができた。中でも、サヴォワ邸は芝生の上に固定された白い箱のように見え、とても印象的だった。“緑”の芝生がサヴォワ邸の“白”を際立たせ、旅行を終えてもなお頭の中には、はっきりとした二色の色と全体像が残っている。サヴォワ邸は「コルビュジェの代表作」や「20 世紀の住宅建築を代表する名作」

といわれ、世界中から多くの人々が訪れている。私が行った時にはたくさんの観光客や学生がサヴォワ邸を取り囲み、中にはスケッチをしている人もいた。コルビュジェの建築作品を実際に見て感じたことは、どんなに狭い空間、敷地でも上手くそして無駄なく使われている、ということだった。内部は外観の規則正しいしっかりとした見た目からは予想がつかないような複雑な造りで、一步建物に入ると階段や床や窓、ちょっとした何も配置されてないスペースでさえ何か意味があると感じさせられた。私は、コルビュジェが建築作品にどのような空間を与えようと考えていたのか、どのような空間構成を目指したのかが気になった。今回のレポートでは、特に印象が強く、名作と言われるサヴォワ邸を例にして彼の考える空間構成をみていきたいと思う。



図 1

サヴォワ邸はパリ都心に住む裕福な実業家、サヴォワ夫妻から週末に過ごす家として依頼を受け、ル・コルビュジェによって 1928 年に設計が開始され、1930 年 2 月に現在目にする住宅の実設計が完了し、1931 年にパリ郊外のポワシーに建てられた。サヴォワ夫人はコルビュジェに対し、部屋の数や用途、サイズだけでなく、建具や照明の種類、コンセントの数まで、とても具体的で細かい要求をしていた。サヴォワ夫人の要求に応えながら、コルビュジェは実現案を含めて 6 回の計画案を出している。最初に出した計画案と実現案は主寝室が 3 階にあることを除いてはほぼ同じ内容であることから、きわめて完成度の高い案が最初から打ち出されていたことがうかがえる。サヴォワ邸は、地下に小



図 2

さな食品庫とワインセラーがあり、1 階は車廻しである「ピロティ」とエントランス・ホール

だけで、それ以外は使用人、運転手の居室、2 階には夫妻の寝室、夫人の私室、子供部屋、客

室、キッチン、配膳室、そしてリビング・ダイニングとしてのサロンなどがある。3階には階段だけがつながっており、壁だけが自立して内部的な空間を構成し、ソラリウム（日光浴場）と呼ばれている。北側に建てられた自立壁がセーヌ川からの北風を防ぎ、南からの日光を快適に浴びることのできる空間が生み出されている。

コルビュジエはサヴォワ邸において、自身の建築原理である、「近代建築の5原則」、すなわち、

「ピロティ」、「屋上庭園」、「自由な平面」、「水平連続窓」、「自由な立面」を最もわかりやすく表現した。また、コルビュジエがサヴォワ邸で実現させたのは「近代建築の5原則」だけではなく、「建築的プロムナード（散策路）」をも実現させている。地上階の平面形は、自動車の回転するU字型のカーブが描きだされている。サヴォワ夫妻がパリから自動車でそのまま建築の中心部まで乗りつける、という設定だ。こうした人間の動きの形象化は2階の屋上庭園のある居間へと導く斜路とも呼応した、計画された途切れることのない一連の体験の流れなのである。地上階の玄関正面に斜路と直行して配置されたU字形階段を経て2階の床面へと上昇する経路についても同様である。「すべての建築芸術は目標と進路というふたつの経路を媒介とする空間形成である。民家だろうと神殿だろうと、すべての建物というものは建築的に形成された進路である。すなわち、そこでは入口をまたいで中に入ると、建築的な形成作用によって作り上げられ、広がりとお行きへの動きに従って統一された空間が、順を追って現れることになり、かくしてそこにある一定の空間が体験させられることになるのである。しかも同時に建物というものは周囲の空間の関係から見れば、ひとつ身体的形式としての目標なのであり、我々がそれに向かって歩み寄ったり、あるいはそこから出ていったりするものなのである。」これは『比較芸術学』で、ダゴベルト・フライが言っていることだ。この「構築的に形成された進路」を、建築家でル・コルビュジエ研究の第一人者である富永譲氏は「建築的プロムナード（散策路）」とし、説明している。つまり、「建築的プロムナード（散策路）」は「空間体験を部屋単位として考えるのではなく、いくつかの場の連続、すなわち、音楽のように運動とともに継起する時間芸術として空間をとらえる視点」なのだ。富永氏は「建築の現象は、人が動くことによって、時間の経過とともに現われてくる。客観的な三次元空間として一挙に知覚されるものではない。」としている。確かに、私達が普段家にいる時、何もせずにじっとしていることはない。睡眠している時以外、家の中を動き回っ



図 3



図 4

ていると言ってもいいのではないか。静止状態で建築作品を見るのではなく、動くことによって本当の意味で作品、つまり住宅を体感できるとコルビュジェは言いたかったのだろう。言われてみれば当然のことであるが、実は 20 世紀初頭の科学・哲学の達成と呼応した空間概念なのだ。サヴォワ邸には人の動きが形象化された進路があり、それを中心として住宅が構成されている。実際にサヴォワ邸を訪れてみて、広い敷地に対してサヴォワ邸自体は写真で見て想像していたよりも小さく感じたが、内部に入ると、限られた空間の中では不思議と広く感じられた。それは、私がサヴォワ邸の中をぐるぐると円運動をするように歩いたからだろう。コルビュジェによって計算され用意された「進路」に知らぬ間にはまっていた。この、私が体験した円運動は、1 階中央に

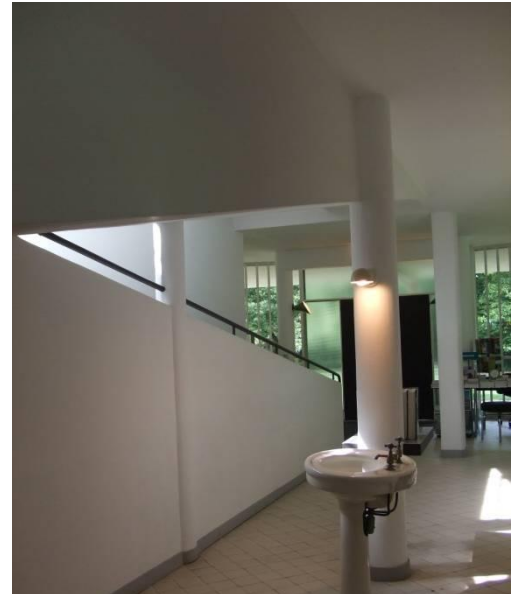


図 5

あるスロープや螺旋階段に沿って視点が移り変わっていくこと、そしてそれ以外の場所でも常に視線が外周を囲む水平連続窓に沿って滑るように次の空間へと導かれていくことに起因する。どの部屋に入っても、その空間だけでは完結しないように意図的に構成されている。更に驚くことは、2 階全体に大きな円運動と小さな円運動が共存していることだ。動きは、1 階のスロープを上がり、2 階のサロンへ入ってから屋上テラスに向かうといったように、2 階の中で大きな反時計廻りを作る。その中に、部屋やキッチンなどで起こる時計廻りの小さな円がいくつも重ね合わされている。



図 6

中央のスロープも含めた、螺旋の運動体はサヴォワ邸の内部構成を複雑にしている。外観の洗練された姿とは違い、外観に出ている柱以外の内部空間の柱は空間構成が優先されているため、全ての柱がグリッドから外れている。グリッドとは、格子のことで、コルビュジェは設計案の格子の交差するちょうど上に柱をおこうとした。しかし、中央にスロープがあることで、理想の位置よりかなりずれている。ル・コルビュジェは住宅を「住むための機械」と呼び、機械のように正確であることを多くの著作で繰り返し主張してきたが、現実の作品では建築的テーマとしてこのような複雑性に取り組んでいた。

ところで、ル・コルビュジェの建築作品「サヴォワ邸」は、そもそもなぜ「20 世紀の住宅建築を代表する名作」と言われ、建てられてから 70 年以上経つのに、未だに世界中の人々を魅了するのだろうか。

それは大きく二つの理由から説明できる。1 つは、コルビュジェが提唱した「近代建築の 5 原則」を目に見える、理想的なかたちで実現しているからだ。サヴォワ邸以前に彼がパリで手がけたものは、不整形な敷地の条件などで非常に大きな制約を受けていたため、5 原則は部分

的にしか実現できなかった。それに対してサヴォワ邸は自由な制約のない土地だった。よって、わかりやすく実現することができたのだ。2つ目は「建築的プロムナード」。サヴォワ邸の前まではある場所からある場所へと移る通路、つまり「廊下」には、それ程重要な役割は与えられてこなかった。建物物の中で、部屋については皆関心があったが、部屋と部屋をどう繋ぐかということには関心がなかった。部屋と部屋を繋ぐ通路を重要視し、身体ごと、そして視線が動くという能動的な姿勢を取り入れた。この「建築的プロムナード」は住宅全体の印象を形成する上で非常に大きな役割を果たしている。コルビュジエ自身は「建築的プロムナード」をアラブ建築からの教訓だと説明している。ヨーロッパのバロックという様式は、静的な固い構成でしかなく、そこには建築的な楽しみは全くない、と。サヴォワ邸は竣工当時、まだ全面的に受け入れられていなかった。

サヴォワ邸の評価がはっきりと変わった大きなきっかけは、2つあるように思われる。1つは建築史家のコーリン・ロウの論文「理想的ヴィラの数字」（1947年、『理想的ヴィラの数字とその他のエッセイ』に所収）と、もう1つは建築家ロバート・ヴェンチュリーによる『建築の多様性と対立性』（1966年）という本だ。サヴォワ邸を見直し、歴史のなかに新たな位置づけをする上で、この2つの著作はとても大きな役割を果たした。

コーリン・ロウの「理想的ヴィラの数字」では、マネリスム後期のイタリアの建築家、アンドレア・パラディオによるイタリア・ヴィチエンツァにあるアルメリコ・カプラ邸（ラ・ロトンダ）という貴族の邸宅とサヴォワ邸との敷地の状況や佇まいの共通性について触れているが、より直接的に説明しているのは、コルビュジエのシュタイ邸と、同じくパラディオによるヴェネツィア郊外のフォスカリ邸という2つの住宅である。平面図とその構造の骨格をダイアグラムも用いながら比較しているのだが、両方とも空間の骨格が酷似している。近代建築とは古典主義に対立するものだとは誰もが考えていた。しかし、コーリン・ロウは、実は近代建築の空間の本質は優れた古典建築ととても似通った構造を持っているということを初めて明らかにした。この著作によって初めて近代建築そのものが歴史的事実として相対化され、客観化されるようになった。近代建築が単なる新しい時代の建築で古典主義と対立するものとしてではなく、長い建築の歴史の中で過去との連続性を持って現れたものであるということ、わかりやすく説明した。パラディオは1600年代以降、新古典主義の時代を含めて約300年間にわたって西洋社会における建築ひとつの理想型、アイコンとして強い影響を与えていた。そんなパラディオとコルビュジエの共通性について分析しわかりやすく説明したことは、当時の人々に衝撃を与えただろう。しかし、肝心のラ・ロトンダとサヴォワ邸については詳しい分析を載せず、最後に、「実はこの2つの建築には非常に近いものがある」と書くに止めて終わっている。この論文によって、ヨーロッパを代表する建築は、ラ・ロトンダからサヴォワ邸に切り替わった。この論文以降、サヴォワ邸が歴史上の新奇な対象、あるいは特異点ということではなく、実は古典的な美学も内包しているという、人々の認識になっていった。

もうひとつ、サヴォワ邸の評価にきわめて大きな影響を与えた論評はロバート・ヴェンチュリーが1966年にニューヨーク近代美術館出版した『建築の多様性と対立性』だ。この本は近代建築をどのように見直すかという非常に明確な意図を持っていて、その後いわゆるポストモダニズムの理論的背景を準備した著作だと言われている。建築は何かの思想を表現するための

道具ではなくて、現実の建築が持っている複雑な要素、ある意味では曖昧さが建築的な表現の豊かさを生むということ、多くの例を挙げながら説明している。ヴェンチュリーは「近代建築のサヴォイ邸を例にとると、コルビュジェは厳格で支配的な秩序設定しながらも、その範囲内での例外的、状況的な不整合を認めている。」と述べている。何かのテーマについて述べる時、何度もサヴォワ邸を例に挙げていることから、いかにサヴォワ邸がたくさんの曖昧さをはらんでいることによって建築的豊かさを生み出しているか、ということがわかる。

コルビュジェのサヴォワ邸は、「近代建築の5原則」を最も純粋に表現した作品として、またコーリン・ロウとロバート・ヴェンチュリーによりそれまでになかった意味を与えられたことで、世間からの評価を高めることができた。しかし、それだけでは建てられてから70年以上経過してもなお人々を魅了し続ける理由には足りない。この住宅でコルビュジェが展開させた空間テーマが、いまだに現代的なものとして建築家や訪れる人々を魅了しているからだろう。サヴォワ邸でのコルビュジェが造り出した空間は、訪れる者一人ひとりに多様な意味を与えている。サヴォワ邸でコルビュジェが完成させた空間構成は、後の世代の建築家が受け継ぎ、展開していくことで、コルビュジェが造り出したのは完成形ではなく、そこからの「始まり」となるのだろう。

今回の研究旅行では、日ごろ何も意識せずにいる建築物の「空間構成」について調べてみたが、何も意識していなかった分「空間構成」というものの奥深さを強く感じた。また、建築とは「変わっていくところ」と「変わらないところ」があることも感じた。既に存在する建築家の作品から意識的に又は無意識でもヒントを得て、そこに建築家独自の考えをのせて展開させていくと、新たに作られる建築物には必ず影響を受けた建築家の考えが出ると思う。今後、サヴォワ邸や他のコルビュジェの作品からインスピレーションを感じた建築家たちが、彼の考えをどう解釈し、取り入れながら、次の次元へともっていくのかが私は楽しみだ。

- 図1 サヴォワ邸外観
- 図2 サロン
- 図3 屋上庭園へとつながるスロープ
- 図4 水平連続窓
- 図5 1階スロープ
- 図6 螺旋階段

《参考文献》

- 「ル・コルビュジェ 建築の詩 12の住宅の空間構成」 富永譲 2003年 鹿島出版
- 「ヘヴンリーハウスー20世紀名作住宅をめぐる旅1 サヴォワ邸／ル・コルビュジェ」
中村研一 2008年 東京書籍

日程

① 8月28日(木)	福岡空港発、香港経由でパリへ	*機内泊
② 8月29日(金)	パリ・ドゴール国際空港着 パリ市内散策	
③ 8月30日(土)	プラネスク邸、オザンファンのアトリエ、スイス学生会館、ブラジル学生会館、救世軍難民院に行く	
④ 8月31日(日)	散策	
⑤ 9月1日(月)	救世軍難民院に行く 市内散策	
⑥ 9月2日(火)	ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸、サヴォワ邸、コルビュジエのアパートに行く	
⑦ 9月3日(水)	パリ・ドゴール国際空港発、香港経由で福岡へ	*機内泊
⑧ 9月4日(木)	香港着 乗り換え 福岡空港着 解散	

旅行要旨

今回、私たち10人のグループは、演習で読んでいるル・コルビュジエの建築作品を実際に見に行き、ただ文章を読むだけでは感じとれないコルビュジエの作品を体感することで、今後の演習における理解力を高めようという目的で研究旅行に行ってきました。現地に行くことで、これまで勉強してきたフランス語を試すこともでき、フランス人の方とも交流をしようと考えていました。

なかなか旅行の予約が取れずに、二班に分かれて行かなければならなくなったことが残念でしたが、先に研究旅行に行った人が経験した成功例、失敗例を挙げ、次に出発する人に活かしてもらおう、ということで、日程は別々になってしまいましたが、10人でこの研究旅行を実行し無事に終えられたと思っています。

現地では、調べていた休館日と違っていたり、工事が行われていたり、想定外のこともありましたが、臨機応変に対応することができました。また、フランス人の方と交流することもでき、充実した8日間をおくることができたのでよかったです。

ありがとうございました。